

「生存」を「生活」に

富山市立呉羽中学校 3年 石島 里紗

私には、三人の妹がいる。そして下の二人は双子だ。二人は今でこそ元気に暮らしているが、小さい頃は様々な病気で大変だった。

双子は妊娠から出産、さらに育児までにおいて、多くの面でリスクを伴う。母と妹たちも例外ではなく、出産の時には当初予定していた病院から急遽、救急車で大きな病院に運ばれた。そこから無事生まれたものの低出生体重児だったため、しばらく NICU での入院が続いた。さらに退院後も病気がちで、何かと病院にお世話になることが多かった。

当時六歳だった私にはお金の事など気にする余裕もなく、ただ母と妹たちの健康を願うことしか出来なかった。しかし、今思えばこの時、あらゆる場面で税金に助けられていたのだ。救急車も NICU も、しばらく続いた通院も、全て税金で賄われている。もし全額自己負担だったら、どうなっていただろう。まだ働いてお金を稼いだことがない私には想像もつかないが、妹たちの命や、今の家族団欒の充実した暮らしがなかったかもしれないと考えると、あのとき妹たちの「生存」と家族の「生活」を助けてくれた税金のありがたみを、より強く感じた。

私は今まで、税金に対してマイナスなイメージを抱いていた。消費税を十パーセント支払うことに、抵抗を感じていたのだ。しかし、九年前の出来事を改めて思い出したことでその考えが大きく変わった。別の見方をすると、たった十パーセントで、社会に貢献できるのだ。大人になると今よりも払わなければならない税の種類が増え、不安になったり、不満が出てきたりするかもしれない。しかし、一生懸命働いて納めた税金は、いつか誰かが困ったとき、助けが必要なときに必ず還ってくる。その対象が自分になることもあるかもしれない。日本では納税の義務があるが、それは同時に、誰もが幸せに生きる権利が保障されているということだ。今、私たち姉妹が楽しく元気に暮らせているのは紛れもなく税金のおかげだから、共働きの両親にはもちろん、税金のある社会にも感謝を忘れてはならないと、私は思う。

『生活』日々の糧を得ながら、それぞれの環境の中で生きていくこと。」私を持っている辞書には、こう書かれている。生きながらにして、「活着している」。誰もがそう感じられるような社会をつくるためには、税金が必要不可欠だろう。

私は将来、医療に携わる職業に就きたいと考えている。妹が入院したときに目にしたお医者さんや看護師さんの働く姿がとてもカッコよく、憧れたのがきっかけだ。一生懸命学び、時には税金の力も借りながら、患者さんの「生存」を守り、「生活」するための手助けが出来たらと思う。夢が叶う日まで、まずは税金を正しく理解し、納めることから始めていきたい。